



碧南ロータリークラブ週報

第2572回例会 平成23年11月30日(水)

● 会長 石川 春久 ● 幹事 平岩 辰之 ● 会場監督 (SAA) 新美 惣英

2011-2012年度 国際ロータリーのテーマ

- 例会日 毎週水曜日 12:30
- 例会場 碧南商工会議所ホール
- 事務局 碧南商工会議所内 〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90
- TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100
- ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp/>
- E-mail: info@hekinan-rc.jp
- 会報委員 鈴木健三・菅原 優・永坂誠司・鈴木宏枝



こころの中を見つめよう 博愛を広げるために

● 齊 唱

ロータリーソング「ロータリー讃歌」

● 本日のメニュー

季節のお弁当 とんがり帽子

● 本日のお客様

中部管区警察局 広域調整部長 新岡邦良氏
中部管区警察局 広域調整第二課 課長補佐 内田和宏氏



奥谷弘和副会長

副会長挨拶

二つのことを報告します。

先ず、山中寛三会員と神谷研（きわむ）元会員の二人展が11月19日から25日までの一週間、碧南市文化会館で開催されました。

山中会員の水彩画は地元碧南にこだわった作品やなんの変哲もないちょっとした花に目を向けた愛らしいものなど楽しい作品がたくさんありました。特に奥様と二人で描かれたものとか、90歳になってから独学で絵を始められたということには、今なおお元気なその姿を思い感動するものがありました。

神谷元会員の写真は、以前にいただいた写真集と同様に自然の美しさを余すところなく切り取ったすばらしい作品がたくさんありました。特に虹の写真や美しい紅葉の写真、そして露出補正が難しい雪景色などの写真にさすが、と感激をしました。

もう一つは地区大会の報告です。

去る11月20日に名古屋のウェスティンナゴヤキャッスルで地区大会が開催されまして、碧南からは石川会長、平岩幹事を始め約20名が参加をしました。

会議は12時から始まりましたので、それまでは友愛の広場で軽い食事をしながら待っていました。

12時に開会になり、地元の聖霊中学校・高等学校の合唱クラブの皆さんによる日本の四季の歌メドレー、見上げてごらん夜の星を、などを交えてハレルヤコーラスまでの歌がありました。美しい歌声にみんなが感動をしたと思います。

その後はいつも通りのセレモニーが行われました。

記念講演にはJR東海会長の須田 寛さんが「観光とリニア中央新幹線」という演題でお話をされました。

ポイントは2つありまして、その1つは観光ということです。

日本での観光産業は現在50億円規模、従業者数は400万人といわれますが、今後の成長を10%とみれば非常によい成長産業だということです。これまでの日本における観光産業の成長率は5%程度ですが世界的には20%以上という国がたくさんあり、10%は決して無理ではない、ということです。観光については観光資源の多様化と観光の対象についてこれまでの見方を変えることにより新しい観光を発掘することができ今後の成長は非常に有望ということでした。

一方、リニアについては技術的な問題はすでに国鉄時代に解決をしておりいかにこれを生かすかということであるということでした。JR東海がなぜリニアにこだわるかということについては、1つ目に東海道新幹線が開業50年近くなり今後何十年かの間にはトンネルや鉄橋を含めた修理をしないといけないのに対してバイパスをどう作るか、2つ目には阪神淡路震災のような震災や津波などが起きたときには東海道新幹線とは別のルートを確保しておかないといけないということ、そして第3番目には環境・騒音などのことを考えると従来の軌道の上を走る列車としてはこれ以上の速度は無理であるという、3つの点について指摘がありました。そのためには公共交通機関としての使命を果たさないといけない、というお話でした。

さらに都市を含めた開発という視点も大切だということでした。このときには話すことはできなかったのでしょうか、その直後にリニア新幹線の駅舎の建設はすべてJR東海が負担をしても平成17年の開通を目指すという、JR東海の方針はすでに決まっていたように思われます。

国全体のことを考えて、事業を進めようとしている姿勢に大変感動を受けました。その上、須田会長はさすがに頭の回転がいいと思わせるように話の内容がまさに立て板に水でして、聞くものを飽きさせない魅力がありました。

地区大会終了にあたりRI会長代理の今井鎮雄氏から講評ということでお話がありました。内容は、地区大会を主管する瑞穂RCがガバナーの出身母体ではないにもかかわらず大変良くできたということ、地区が大変親切にお世話をしたということ、などでした。

碧南クラブのメンバーは途中で消えたりすることもほとんどなく、みんな揃って無事に帰ってきました。

杉浦保子会員が地区大会終了後次のような一句を詠んでおられましたのでご披露します。

「なごやかな 地区大会や 冬隣」

最後に税理士として税金の話を一言。

寄付金の扱いが今年はかなり変わっています。例えば東日本大震災に対する寄付をした場合の取り扱いなど大きく変わっており、税金の面でも安くなるようになっていますのでぜひお近くの税理士にご相談下さい。

幹事報告

- 例会変更等は幹事報告書の通りです。
- ガバナー事務所よりロータリー希望の風奨学金ウェブサイト開設のお知らせが届いております。



木村徳雄副幹事

委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数71名(内出席免除者14名の内出席者5名)出席者53名	
出席対象者 53/62名	出席率 85.48%
欠席者18名(病欠者2名)	前々回修正出席率 97.01%

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

〈ニコボックス委員会〉

- 山中 寛三君 先週、神谷君との2人展無事に終わりました。色々加藤先生始め、皆様にお世話になりました。
- 加藤丈太郎君 山中寛三、神谷研両先生の展覧には多くの方々のご参集を賜りまして誠にありがとうございました。大変感謝申し上げます。作者ともども喜んでいました。過日のガバナー補佐杯は0.2打差の第2位で優勝は逃しましたが、楽しいゴルフが出来ました。
- 加藤 良邦君 去る11月23日ガバナー補佐ゴルフ大会には長田昌昇次期ガバナー補佐杯実行委員長又、当日参加のメンバーの皆様にお世話になりました。
- 平岩統一郎君 メイクアップが続きました。
- 石川 春久君 } 地区大会へのご参加ご苦労様でした。
- 平岩 辰之君 } 西三河分区RCガバナー補佐杯ゴルフ大会ご参加ありがとうございました。次年度ガバナー補佐杯ゴルフ大会実行委員長長田昌昇様、次年度ホストクラブ表明挨拶ご苦労様でした。ありがとうございました。
- 木村 徳雄君 先日、ロータリークラブゴルフコンペにて繰り上げ優勝でなく、実力と運で優勝しました。又、11月23日ガバナー補佐杯も碧南RCとして10位とニアピンを頂きました。運を使いきらないように頑張ります。
- 新美 真司君 杉浦栄次君にお世話になりました。
- 奥田 雪雄君 倉内さん、70度おいしかったです。ありがとうございました。ちなみに、2本とも空いてしまいました。
- 角谷 信二君 本日の卓話講師、新岡邦良様を紹介します。
- 清澤 聡之君 当山西方寺報恩講、無事終了致しました。京都東本願寺に於いて、親鸞聖人750回御遠忌御正当報恩講法要が終了しました。2万人余りの参拝でした。感動いたしました。
- 榊原 健君 11月27日(日)塩釜、碧南サッカー交流講演会に際し、某電力会社の栗山さんに大変お世話になり、ありがとうございました。お陰で大変喜んで帰られました。

卓 話

「東日本大震災に伴う警察活動等について」

中部管区警察局 広域調整部長 新岡 邦良氏

はじめに

3月11日発生した「東北地方太平洋沖地震」は、国内史上最大級となるマグニチュード9.0を観測し、大規模な津波等により東北三県（岩手、宮城、福島）の太平洋側を中心に死者・行方不明者合わせて約2万人という甚大な被害を及ぼした。

さらに、東京電力福島第一原子力発電所が事故を起こし、半径20キロに避難指示が出されたほか、大量の放射性物質を周辺地域に飛散させた。

私は、発災から2カ月あまりの間、宮城県警警備部長として災害警備の最前線で指揮を執らしていただいた。

その経験を基に、同県内における発災当初の警察活動を中心に紹介する。



新岡 邦良氏



1、警察活動

(1) 警備体制の確立

○宮城県警では、地震発生と同時に警察本部長を長とする「災害警備本部」を設置（3,900人体制）し、警備体制を確立するとともに、被災情報の収集等に当たった。

※立ち上がりは、極めて早かったのは、執務時間帯であったことも幸いしたが、宮城県警では、「宮城県沖地震」が10年以内に70%、30年以内に99%と極めて高い確率で発生するとの予測があったことから、災害警備計画の見直しや、実戦的訓練を繰り返し実施していたことがあげられる。



特に、警備本部体制表の班編成や人員配分等を、実質的なものに改め、さらに、本部員一人一人に具体的な任務付与をするなど実戦に即した体制に全面改正し、有事に備えていたことが功を奏したものと考えている。

(2) 発災当初の110番受理状況

ア. 110番入電状況

- 11日 1,775件
- 12日 2,324件（ピーク）
- 13日 1,343件

※ちなみに昨年の1日平均は、427件

※発災後、1週間程度は、7台の受理台（14回線）が24時間通話状態であった。

※なお、110番は、携帯電話からが全体の約75%であった（その他加入電話約14%、警察電話約10%）。



イ. 通報内容

- 地震発生から40分位は、仙台市内からの「火災」「ガス漏れ」「救助要請～閉じ込め、取り残され」等の通報であったが、
- 午後3時29分（地震発生から43分後）、南三陸で家屋が津波に流されたとの津波関連最初の入電があった。

津波に関しては、その後、

- ・午後3時35分、（地震発生から49分後）南三陸町役場水没
 - ・午後3時44分、（発生から58分後）南三陸警察署3階まで水没
 - ・同時刻、気仙沼警察署1階まで水没
 - ・午後4時丁度、（地震発生から1時間14分後）仙台空港滑走路まで津波到達
 - ・午後4時2分、（発生から1時間16分後）塩釜警察署まで津波到達
 - ・午後4時13分（発生から1時間27分後）南三陸で津波第2波確認
 - ・午後4時42分、（発生から1時間56分後）津波第3波確認、高さ約15m
 - ・午後5時33分、（地震発生から2時間47分後）南三陸でこれまで最大規模の津波確認などの入電があった。
- 地震発生から40分以降になると、仙台市以外の県内全域（沿岸部）からの110番通報が入るようになった。
- 内容は、津波襲来などの災害情報や救助要請等であり、1時間当たり40件前後の通報が寄せられた。
- 地震発生から3時間以降については、入電の80%以上が「救助要請」を内容とするものになり、最大時、約7,400人が孤立し、救助を待っていた。

(3) 被害実態の調査

※写真は、発災当日の名取市^{ゆりあげ}閑上地内の状況

○地震発生後、即時（午後3時5分）に県警ヘリを出动させ、ヘリテレによる被害実態の調査を行った。

○当初、仙台市内の被災状況を調査していたが、津波到達の報を受け、みぞれ混じりの悪天候の中、沿岸方面に向かい、仙台東部道路に押し寄せる。津波の様子を伝えた（午後4時10分ころ）。

○翌日からは、警視庁等県外ヘリの派遣を受け、最大9機体制により情報収集等を実施した。

※特に、津波等により孤立した集落等のうち、陸上から近づくことのできない地域については、レンジャー隊員をヘリから降下させ、被害状況の調査を行ったほか、緊急必需品を届けるなど、機動力を生かした活動を展開した。

○このほか、各警察署やパトカー等からの通報により、被害実態の早期把握に努めた。

(4) 救出救助・捜索活動

ア. 発災直後の救出救助活動

○発災と同時に参集した県機動隊、管区機動隊等県内部隊を津波による被害甚大な沿岸警察署に分散派遣したほか、翌12日には、第二機動隊を部隊編成し、仙台市若林区荒浜地区等において救出救助、捜索活動等に当たらせた。

○また、発災翌日には、警視庁等県外からの広域緊急援助隊が順次到着し、被害甚大な沿岸地域で捜索活動等に従事した。

※広域緊急援助隊とは

阪神I淡路大震災を教訓として、平成7年、各都道府県警察ごとに機動隊員を主体に創設された部隊である。

高い救出能力と自活能力（3日間）を持っており、国内で大規模災害が発生した場合に、都道府県の枠を超えて広域的に活動する。

広域緊急援助隊は、警備部隊、交通部隊、刑事部隊からなり、全国に約4,700人、中部管区内には約520人の隊員がいる。

※地震発生当初、110番で次々と入る救助要請に対し、警察だけではとても応じきれなくなったことから、県の災害警備本部に詰めていた自衛隊幹部を通じて自衛隊にも対応してもらった。

※こうして、警察、自衛隊、消防等が夜を徹し、必死の救助活動を継続したが、次々と入る救助要請に対し、大量のガレキや道路の損壊に加え、度重なる余震等の影響により、陸上での作業は難航した。

○こうした中、（※下の方の写真にあるとおり）3月20日には、石巻市門脇町地内の倒壊家屋を捜索中の石巻署員が屋根の上で救助を求める少年を発見、9日ぶりに少年（16歳）と家屋内にいた祖母（80歳）の二人を救出した。

その模様は、NHK等の生放送で全国に中継され、多くの国民に感動を与えたところである。

○生存者の救出は、3月20日の2人が最後となったが、この間、全国警察の総力を挙げた救出救助活動により、3県合わせて約3,700人の被災者を救出した。

○発災当初は、目視や人力による救助が続いたが、やがて人力のみによる救助には、限界がきて重機が必要になった。しかし、当初、警察が専用に使える重機は少なく、捜索活動が思うように進まなくなった。



※その後、県との交渉で県費により警察専用の重機が調達できるようになり、事態は大きく改善された。

イ. 警察航空隊の活動

- 陸上からの捜索活動が困難を極める中、レンジャー隊員が搭乗したヘリによる救出救助活動が効果的に行われた
- 3月12日には、JR仙石線「野蒜駅」下り線の列車内に閉じ込められていた乗客9人を救助したほか、同駅上り線付近で孤立し、避難していた住民11人を救助した。
- このほか、発災後11日間で宮城県警レンジャー隊員等がヘリと連携して262人を救出するという超人的な活躍をした



ウ. 海外援助隊の支援

- 発災2日後（3/13）には、韓国救助犬チームが入県し、仙台市若林区荒浜地区で救出救助活動を展開したほか、4月8日までの間、8カ国1地域の573人が捜索活動等に当たった。

(5) 検視活動等

ア. 検視

- 捜索活動とともに、最も困難を極めたのは検視活動であった。
 - 最大時24か所の検視場所（遺体安置所）において、県外からの特別派遣部隊を含め、500人を超える体制で検視を実施した。
- ※写真は、サッカー・ワールドカップ会場として使用された「グランディ21」という県の施設



- 収容遺体については、発災当初4日間で約1,200体であったが、6日目（3/16）に1日1,000体を超え、検視活動は極限状態となった。

その後、徐々に減少したが、発災10日目（3/20）の収容総数は、約5,200体に上った。

なお、現在（10月末）では、陸上で発見される遺体が、月2～3体まで減少している。

- 当初、多数の遺体収容が続き、未検視数の増大や安置場所の不足、火葬・埋葬場所の不足などが心配されたが、警察による県の関係部局や市町村等との調整など諸対策により、事なきを得た。
 - 火葬については、県内での処理能力が1日約50体程度と全く不足していたことから、県警が東京都と交渉した結果、とりあえず500体の火葬が可能となった。
- さらに、その後、枠を拡大して約860体について火葬を行った。

イ. 身元確認

※写真は、県内で最も多くの検視を行った石巻市内の「元青果市場」

- 収容遺体については、指紋やDNA型鑑定、デンタルチャート（治療痕等）、写真台帳、着衣、所持品（携帯電話等）、身体特徴等から総合的に判断して身元確認に努めた結果、判明率が90%以上に達した。



※現在（10月末）身元が判明しない遺体が約580体（全国では約850体）あるが、最終的に判明率100%を目指して努力しているところである。

ウ. 遺族支援活動

- 発災翌日に「行方不明者に関する相談業務に対応するための窓口」を開設し、現在まで7万人を超える電話相談を受け付けたほか、4月1日から「身元不明遺体に関する相談窓口」を開設するなど、遺族支援活動を行った。

○さらに、最大時約200人体制の「遺族支援班」を編成し、遺体安置所において身元が判明した遺体の引き渡しや相談等、支援活動を実施しており、これまで約10万人を超える遺族等の対応に当たった。

(6) 被災地を中心とした治安対策

○被災地域では、全刑法犯の認知件数が前年同期比で減少しているものの、震災に伴う混乱や、被災者の窮状に付け込んだ犯罪（避難者宅を対象とした空き巣や出店荒らし等の侵入窃盗等）が発生している。

○また、発災当初は、流言飛語等により、被災者が不安をことさら高めていたことから、被災者の安全・安心を確保するため適切な広報に努めたほか、県外からの特別派遣部隊を主体とする「街頭パトロール隊」を編成して、被災地における治安対策を強化した。



2 警察職員の被害

○一連の災害警備活動を通じて最も辛かったのは、警察官の殉職事案であった。

○宮城県警では、11人が殉職し、いまだ2人が行方不明である。

※なお、全国では、25人が殉職、5人が行方不明となっている。

○殉職者の一人、仙台南警察署 荒井交番の 渡辺巡查部長

（当時58歳）は、同僚3人とともに、津波で多くの犠牲者を出した若林区荒浜地区で交通整理や住民の避難誘導に当たっていた。

同僚の1人が迫りくる巨大津波に気が付き、パトカーに乗るよう声をかけたが、渡辺部長の姿は見当たらなかったため、やむを得ず、他の同僚2人と近くにいた住民を乗せ、避難した。

結局、渡辺部長は、発災から6日後（3/17）に、現場から約100m離れた民家の玄関先で遺体となって発見された。



当時、この殉職現場付近を車で通ったという会社員の女性が、マスコミの取材に対し、「渡辺部長と思われる年配の警察官から『内陸へ行け』と大声で指示され、進路を変えて走ったおかげで命が助かった」として感謝の言葉を述べている。

○このほか、殉職、行方不明となった警察官は、いずれも自らの危険を顧みず、最後まで住民の避難・誘導に当たり、帰らぬ人となった。

※本人達は大変心残りであったと思うが、その献身的な行動について長く語り継いでいくとともに、合わせて、このような殉職者を出さないようにすることが我々に課せられた責務であると考えている。

○こうした中、間一髪之差で助かった事例が多数あった。

※写真は、発災翌日午前11時ころ撮影されたものであるが、赤枠で囲った3階建ての建物が南三陸警察署である。

○これは、同署に勤務する「刑事係長」の感動の物語である。

彼は、既に内示されていた人事異動に備え、休暇を取って官舎で荷造り中に、妻とともに地震に遭遇した。揺れが収まった後、すぐに約1キロ離れた警察署に徒歩で向かったが、署員は、すでに高台に移動して

いたため、署内には誰もおらず、屋上に上ったところで、迫りくる津波に気がついた。津波は、3階建ての屋上まで押し素克たため、さらに一段高いところまで登って、船や車が流される様子を呆然と眺めていた。その後、雪の降る中、その場で寒さに耐えながら一晩



過ぎ、翌朝、屋上に残っていた国旗を半旗にして掲揚した。

※見づらいと思うが、ほぼ壊滅状態の街で、わずかに残った警察署の建物の屋上に半旗が掲げられている。

なお、官舎の3階の部屋に残っていた奥さんも、津波に襲われたが、押入れの天井付近に上って、間一髪、難を逃れた。

津波は、3階建ての官舎を飲み込み、乗用車が屋上に押し上げられた状態で残っており、まさに、奇跡的な夫婦の物語である。

3 東南海・南海地震等への備え

これからの話は、他人ごとではありません。

皆さま方に直接かかわる話です。

南海トラフ（海底にある船底型の地形）では、これまで概ね90年～150年周期でマグニチュード8クラスの大規模地震が発生しており、

1605年「慶長地震」M7. 9

1707年「宝永地震」M8. 6

1854年「安政東海・南海地震」M8. 4<三連動>

1944年「東南海地震」M7. 9

1946年「南海地震」M8. 0



中央防災会議の地震調査研究推進本部は、本年1月1日時点での評価として、今後30年以内に「東南海」では70%程度、「南海」では60%程度の確率でM8程度の地震が発生すると予測している。

さらに、中央防災会議の専門調査会は、平成15年9月、「東海、東南海、南海」の三連動地震が発生した場合の被害想定として、M8. 7の巨大地震により、死者数約2万5千人（建物倒壊12,200人、津波9,100人等）に達すると予測している。

しかし、最近では、東日本大震災を踏まえ、東南海・南海地震等に対する被害想定的大幅見直しの動きが加速化しており、三連動震源域の南側の海溝軸や日向灘に新たな震源域を想定し、四連動、五連動地震をモデルとして検討する必要性も打ち出されている。

そうした場合、津波の規模はこれまでの約2倍の20メートル以上となり、名古屋市においては、名古屋駅まで津波が到達する可能性があるとして予測している。

このほか、今後予想される「東南海・南海地震等」の特徴として、

○家屋の倒壊による被害（圧死）～「阪神・淡路大震災型」

○建物火災による被害（焼死）～「関東大震災型」

○津波による被害（溺死）

など3つの形態が複合した大規模な被害が想定される。

※さらに、東日本大震災と比較して被害想定地域に居住する人口が約5倍、経済規模は約10倍に上るため、我が国に与える影響ははるかに大きいものがある。

こうしたことから、管区警察局としては、管区内各県警と緊密に連携して、最新かつ最悪の被害想定に基づいた災害警備計画等の整備・見直しや、皆様方や自治体等と連携した総合的な防災訓練等を実施し、三連動地震等に備えてまいりたいと考えている。

次回例会案内 平成23年12月14日（水）
卓話「電気事業をとりまく、あんな事こんな事」
会員 栗山 章君